

神秘家 Henry David Thoreau の挫折*

六 川 信**

Henry David Thoreau (1817-1862) の作品や日誌には、自然観照の詩人、自然科学者、政治社会批評家、古典学者、哲学者、超絶主義者、文学作家、測量技師等の顔が現われている。研究家は、彼を節儉家、禁欲主義者、無神論者、変人、人間嫌いなどと論じてきた。これらのどの側面をとっても、彼の全体像の一部を表わすにすぎない。彼を貫いて流れる実体ないし本質は何であろうか。

文学史的視点からは、Thoreau は超絶主義を代表する作家の一人である。しかし、「超絶主義者」は彼の本質を語るには不十分な言葉だ。何故なら、超絶主義は明確な思想体系ではなく超絶主義者各々により色合いが異なるからである。彼の本源的な人物像についての定説はないのではなからうか。それは、Thoreau がきわめてとらえにくい作家であることに起因していると考えられる。さて、古来の神秘家を見るとき、その実像は常に把握困難であることに気づく。Thoreau に神秘主義の光をあて距離をおいて彼を見るとき、その光が彼の内面の深くに達し彼の真の姿を映し出すように思われる。従って、この小論では、「Thoreau は神秘主義の実践家であった。自然観察やその記録などは彼にとって第二義的なことであった」という仮説をたて、その仮説のうらづけをしつつ、Thoreau の本質を検討したい。

1

Thoreau は、実体把握の困難な文学者であり彼の生前の親友にも真の姿は理解されていなかった。Thoreau の師 Ralph Waldo Emerson の *Nature* (1836) は Thoreau に大きな衝撃を与え彼の世界観形成の根底となったことは周知のことである。この Emerson ですら Thoreau を自然主義者 (naturalist) として理解していたにすぎない。この事実が Emerson の追悼文 “Thoreau” に明白である。 “Yet, hermit and stoic as he was, he was really fond of sympathy, and threw himself heartily and childlike into the company of young people,……I cannot help counting it a fault in him that he had no ambition.”⁽¹⁾ このことばは、隠者、禁欲主義者としての Thoreau 像を初めて世に示したが、Emerson は禁欲主義の底深く眠っている Thoreau の本質的魂を理解できなかったのだ。Thoreau に野望のないのは欠点だと述べているのは、神秘的合一の達成という冒険にどこでいた Thoreau の目標を洞察できなかった証拠である。Emerson は超絶主義の思想家で Thoreau はその思想の実践家であったところに両者の本質的相違があり⁽²⁾、神秘主義の実践の中味は Emerson の理解を超えていたといえよう。神秘家 Thoreau をも Emerson の思想の中に閉じこめておく意見があるが⁽³⁾、それは誤りとしなければならない。

* 昭和53年10月 第17回日本アメリカ文学会全国大会において発表

** 一般科 英語 助教授

原稿受付 昭和54年9月26日

Thoreau の晩年15年間の親友 Ellery Channing は “I have never been able to understand what he meant by his life……Why was he so disappointed with everybody else &c. Why was he so much interested in the river and the woods and the sky &c. Something peculiar I judge.”⁽⁴⁾ “His East Indian studies never went deep,……“what is Om?” he entered not.”⁽⁵⁾ と述べているように、Thoreau の神秘的な面については全く無知であったと言ってよい。

Harrison G. O. Blake は Thoreau の弟子格で生涯にわたり書簡の交換を続けた。その書簡から判断するとき、彼も Thoreau の次元の高い霊的要素には気付いていなかったと見てよい。Thoreau の霊的大志に気付いていたのは Bronson Alcott のみではなかろうか。Alcott は、 “He is less thinker than observer; a naturalist in tendency but of a mystic habit, and a genius for detecting the essence in form and giving forth the soul of things seen,……His mysticism is alike solid and organic, animal and ideal.”⁽⁶⁾ と述べる。Thoreau も彼を “one of the last of the philosophers”⁽⁷⁾ と呼び、 “a true friend of man” (Walden, 269) と称えている。

次に Thoreau 研究家はどうだろうか。Mark Van Doren は “Thoreau’s main product was nothing, and his main effort vain, his own Journal best betrays.”⁽⁸⁾ と述べており、Thoreau の神秘的実践については殆んど無知であったと思われる。Sherman Paul も Walden の年代に続く Thoreau の生涯を絶望の時代と考えている。 “The last decade of Thoreau’s life was a decade of increasingly frequent crises, the testimony of which was all too clear in the thirteen *Journals* of the years from 1850 to 1861. These *Journals* record the desperation of the spiritual seeker who has lost his communion.”⁽⁹⁾ この両者は Thoreau の神秘主義を無視しているに等しい。Helen A. Snyder は東洋の神秘思想と Thoreau の思想を比較し、印度經典からの原文と Thoreau の作品に表われた引用との実証研究を行っている⁽¹⁰⁾。しかし、Thoreau を神秘家として把握してはいない。Arthur Christy は Thoreau の印度思想をかなり詳細に研究し、彼の神秘主義を無条件で肯定している。Thoreau をニュー・イングランドの yogi と断定し印度思想の影響を強調する。しかし、彼の主旨は、自分の思想の補強のために印度思想を借用したのであって本当の yogi にはなれなかったというものである⁽¹¹⁾。Joseph Wood Krutch は Thoreau の神秘主義を論じた Christy の主張を再確認しているが Thoreau を神秘主義の実践家としてとらえその実践 (mystical practices) について詳細に検討してはいない⁽¹²⁾。神秘主義者 Thoreau を最も詳細に論じているのは Charles Calvin Kopp である。彼は Thoreau をアメリカの神秘主義の伝統の中に位置づけ世界の偉大な神秘家の列に加える。自己と自然との完全な調和の中で自然の中に神の啓示を発見し神との神秘的融合の実体験をし、神秘家として成功者であったと論じている⁽¹³⁾。

要するに、Thoreau が神秘家であるか否か、また研究家の結論の正否など、神秘主義の視点からの Thoreau へのアプローチは議論の余地を残している。

2

Mysticism の訳語には神秘思想と神秘説があるという意見もあるが⁽¹⁴⁾、Mysticism (神秘

主義)と Mystical Thought (神秘思想)は区別されなければならない。神秘主義には、ユダヤ・キリスト教的伝統の絶対的他者との union, spiritual marriage, ウパニシャッドの形而上学的ヨーガ体系の二者との合一体験 Samādhi, 仏教の身心脱落の悟りの境地など諸形態がある⁹⁹。禅体験では、修道の形態は神秘的であっても、証悟においては絶対者と自己との融合という神秘的合一として規定できない¹⁰⁰。

神秘主義という言葉は多義的であるが、Occultism を含め奇跡や超自然現象と結びつけた偏狭な意味に解してはならない。神秘主義の定義は夥しい数にのぼるが、二、三を挙げる。「神秘主義は、心の中に、また自然界の中に、生きた神の存在を実感しようとする試みである」(William R. Inge)¹⁰¹。「神秘主義は、いわゆる神秘不思議に対しての知的探求とは全く異なったものであり、絶対者との間に意識された関係を創る営みである」(Evelyn Underhill)¹⁰²。「自己と自己よりはるかに偉大な、世界の魂と呼ばれるもの、すなわち絶対者との結合が現われる内面的な状態が神秘主義である」(Henri Sérouya)¹⁰³。東京大学出版会『宗教学辞典』(1973)には、「神秘主義とは、神最高實在、あるいは宇宙の究極の根拠などとして考えられる絶対者を、その絶対性のままに自己の内面で直接に体験しようとする立場、そしてその体験によって自己が真実の自己となるとする立場をいう」と記されている。これらの定義にも見られるように、神秘主義は見えない世界、心理学的に言えば無意識の領域にかかわっている。日常の平常経験とは異なった合理的思惟を超えた直観的な独特な神秘体験をその内容とする。この神秘体験はどんな特質をもつものなのか。William Jones, Evelyn Underhill, 岸本英夫、藤田富雄の所説を参考に、何人も認めうると思う神秘体験の特質を簡明に要約してみよう¹⁰⁴。(1)純個人的体験であり言語表現不能の状態、(2)直観的に心の奥まで透徹する思惟を絶した直接体験、(3)瞬時的に超絶的神性に触れる実体感、(4)心の歓喜と高揚感、(5)自己の意識が停止したような受動的状態。

Thoreau は Emerson の弟子として熱心な超絶主義者として生涯を歩み出し、Emerson から organic な宇宙観を修得した¹⁰⁵。そして、自然の中に神の啓示があるから、自然に没入し自然と融合することによって、物象としての背後に存在する時間と空間を超えた永劫なる究極の實在に到達することが真の生き方であると学んだのである。この自然との融合とか、見えざる永遠なる真實在と自己の肉体に宿る霊の本体(超絶主義者はクエーカーの用語を借用し“inner light”と呼んだ)の合一などということは、先に掲げた神秘体験の特質にてらして考えると、きわめて宗教的であり神秘的なことである。Thoreau がこの神秘的なことの実践家へと変貌していったのは、Emerson の影響によるというより彼の導きで知った『マスの法典』と The Bhagavad-Gita との絶大な影響によると考えるのが至当であろう¹⁰⁶。

Emerson の紹介で Thoreau が読んだ最初の印度思想関係の文献は、Sir William Jones の訳 The Ordinances of Menu According to the Gloss of Culluca である。彼の Journal に明らかなように、1840年から翌年にかけて耽読していった。彼はこの『マスの法典』から宇宙の最高の神を知るには purity の原理を貫き静寂と瞑想を通してであることを学んだ。“Menu says that the “supreme omnipresent intelligence” is “a spirit which can only be conceived by a mind slumbering.” Wisdom and holiness always slumber; they are never active in the ways of the world.” (Journal, March, 1841)¹⁰⁷。瞑想と禁

欲と孤独を求めて Walden 湖畔の独居生活に入る動機となったのは、当時流行の森への隠棲生活への追従というよりも『マヌの法典』の教義の影響であった。従って、彼は真剣にその生活にとりくんだ。それは “I went to the woods because I wished to live deliberately,……” で始まる独居生活の目的を語るかの有名な一節 (Walden, 90-91) に端的に暗示されている。

Thoreau が神秘主義の実践家へと metamorphosis するのに大きな影響を及ぼしたもう一つの聖典は *The Bhagavad-Gita*²⁴ である。彼は、19世紀の標準版となっていた Warren Hastings の序文のある Charles Wilkins の訳 *The Bhagavat-Geeta* (London: Nourse, 1785) で読んだ。独居生活を開始した1845年の冬のことである。その後、*Gita* は Thoreau の生涯の愛読書となる。彼は *A Week* の中で、 “The reader is nowhere raised into and sustained in a higher, or rarer region of thought than in the Bhagvat-Geeta. …… It is unquestionably one of the noblest and most sacred scriptures which have come down to us.” (W. I. 142) と *Gita* を称え、 “It (=the Oriental philosophy) only assigns their due rank respectively to Action and Contemplation, or rather does full justice to the latter. Western philosophers have not conceived of the significance of Contemplation in their sense.” (W.I. 142-143) と述べている。この聖典から Thoreau が学んだ最大のものは静かなる瞑想であったことはこの引用文からも明らかである。*Gita* の影響という角度から考えると、ヴィシュヌ神は Brahma と同一視されクリシュナはヴィシュヌ神の化身であるから、*A Week* の “everlasting Something” (W.I. 182) と “the Universal Soul” (W.I. 131), また *Walden* の “the perennial source of our life” (Walden, 133) は Brahma と一致すると考えていい。従って、Thoreau の目指したことは現象界 (maya) への依存から脱却し Brahma との融合にあったと換言できる。こう見てくると、Thoreau の希求した根源的実在 (the Ultimate Reality) は東洋の神秘家の求めたものと類似している、と言えるだろう。

Thoreau は1849年11月 Harrison G. O. Blake への書簡で “I would fain practice the yoga faithfully. …… I am a yogi.”²⁵ と述べ、*Journal* で “The fact is I am a mystic, a transcendentalist, and a natural philosopher to boot.” (March 5, 1853) と自称している。この言葉は、ワシントンの科学振興協会の事務局から科学の関心のある分野の回答を求められ、当協会への加入をすすめられた、という記述に続いて記されている。この文脈の中で考えると、これを神秘家 Thoreau の高らかな宣言と解していいだろう。事実、1847年以降 Jean Louis Rodolphe Agassiz の影響の下に自然科学への興味がかきたてられていたが²⁶、Walter Harding や Miriam Alice Jeswine も述べているように、神秘家として生きる Thoreau の願望は生涯にわたり不変であった。彼は上記の二大聖典から神秘主義の実践の方法を借用し、神秘家の道を歩み深めていったといえる。

3

神秘家に入る第一要件は、日常生活を浄化し事物への欲望と執着を離脱し清貧と至誠心に生きることであり、瞑想によって精神の純化と高揚をはかることである。これは Plotinus 以来幾多の神秘家の伝統的常套的手段であった。Thoreau がこれを『マヌの法典』と *Gita*

から学んだことは先に述べた。次に彼の神秘主義の実践について考察する。

当時の New England にはまだ簡素と禁欲の生活理念は残っていたが、都市化が進み西漸運動が高まり、人々の心は富の追求へと向いていった。神秘家 Thoreau は都市に充満する機械物質文明の害毒を排撃し、富を求めて西部へ進む人々を蔑視した。彼は同時代の人々の富を求める流儀を拒否し衣食住にわたる日常生活を簡素化した。これは *Walden* の “Economy” の章にくわしく記されている。 “Simplicity, simplicity, simplicity!...Simplify, simplify.” (*Walden*, 90-91) この言葉は彼の生活信条であり生涯にわたる基本的教義であった。生活の余分な虚飾を取り除き内面生活の向上を求めたことは次の引用からも明らかである。 “Most of the luxuries, and many of the so called comforts of life, are not only not indispensable, but positive hindrances to the elevation of mankind. With respect to luxuries and comforts, the wisest have ever lived a more simple and meager life than the poor.” (*Walden*, 14) この一節には印度聖典の影響が顕著である。俗世から離脱し過去をすっぱりと捨て去り、因習と伝統を放棄し、事物への執着を脱するため、彼は簡素化の原理を極限にまで押し進めていった。この彼の有り様を知るとき、我々は俗界を捨てたヨーガ行者の姿と Thoreau の類似に気づく。

都市文明に決別した Thoreau は、『西部』 (=Arcadia としても自然) への Saunterer = Holy Lander となった。聖地巡礼者はひたすら「歩く」のだ。 “I think I cannot preserve my health and spirits, unless I spend four hours a day at least—and it is commonly more than that—sauntering through the woods and over the hills and fields.” (W. V. 207) 彼の歩みはサドウ (ヒンズー教の修業僧) や山獄修行僧の行と、苦行の点で異質ではあるが、聖地への儀式として極めて類似している。歩くことが事業であり職業なのだ、と彼自身が述べる。歩くという単純な身体的行為の反復は精神集中を生み出すものであり、千日回峰にも見られるように、宗教的修業の術である。 “I am alarmed when it happens that I have walked a mile into the woods bodily, without getting there in spirit.” (W. V. 211) 彼は身心両面で歩む。身心の修業は不立文字の境地への不可欠の条件でもあることを我々は思い出す。

Thoreau が好んで赴くのは原生林で覆われた人跡未踏な沼地であった。 “I enter a swamp as a sacred place, a *sanctum sanctorum*.” (W. V. 228) そこは、自然を敬虔視し自然の生命と調和して生きた無垢で清純素朴な古代人の原始世界を暗示しており、靈感と直覚力を鋭敏に保持し自己の *innocence* を保つ最適な場所なのだ。夏は毎朝、*Walden* 湖で水浴をしたが、ガンジス河の水とまざり合うその水での水浴は清めの宗教的儀式であった。そもそも *Walden* 湖そのものが神秘家 Thoreau の目指す境地の象徴であった。 “I go to my well for water, and lo! there I meet the servant of the Bramin, priest of Brahma and Vishnu and Indra, who still sits in his temple on the Ganges reading the Vedas…… I meet his servant come to draw water for his master, and our buckets as it were grate together in the same well. The pure *Walden* water is mingled with the sacred water of the Ganges.” (*Walden*, 298)

Thoreau は孤独を愛した。 “I find it wholesome to be alone the greater part of the time……I love to be alone. I never found the companion that was so companionable

as solitude.” (Walden, 135) 彼は人との交わりより 自然を愛したのだ。独居する小舎の戸口に、孤独と静寂の中、日の出前の水浴の後正午まで坐っていた Thoreau は、夜のトウモロコシのように成長するのだった。瞑想の意味を悟ったのである。天候のいかんにかかわらず自然を逍遙したのも、植物群や動物群の研究より言葉で表現困難な境地を発見したい神秘家の願いからであった⁸⁾。

Thoreau は、清貧、禁欲、孤独、無垢な荒野との共感、瞑想による精神の高揚と意識の無限への拡大など、神秘家に入る要件をそなえていた。重要なことは、彼がこれを一つの思想として集大成する意思は全くなく、自然との霊的融合を求めてひたすら逍遙し瞑想にふけたという事実である。彼を神秘主義の実践家と呼びうる十分な理由がここにある。

4

次に、Thoreau の神秘体験について考察する。夏にワイシャツの袖をまくり上げて石の多い湖の岸を歩いているとすべての物が常と変わって親しみ深く感じられるのだった。Thoreau は、この体験を *Walden* の “Solitude” の章の冒頭で次のように記している。

This is a delicious evening, when the whole body is one sense, and imbibes delight through every pore. I go and come with a strange liberty in Nature, a part of herself. ...all the elements are unusually congenial to me. ...Sympathy with the fluttering alder and poplar leaves almost takes away my breadth; yet, like the lake, my serenity is rippled but not ruffled. These small waves raised by the evening wind are as remote from storm as the smooth reflecting surface. (*Walden*, 129)

この一節について、Johann Zimmerman の *Solitude* の影響があるという説もあるが⁹⁾、Thoreau の実体験があったことは確実である。“evening” の語がその証しの鍵となっている。太陽が西へ沈む直前の時は、禪的に言えば陽が陰に変わる時であり、天地と共に自己が死にきっていき大自然との一体感がわき易い時なのだ。この夕暮れどき、Thoreau は瞑想しつつ独りで歩いていた。心は静寂そのものだ。木の葉にすら共感し彼の息はつまりそうだ。彼は自然と一体になっている。森の小舎に住みはじめて数週間たった頃、静かに降る雨の日にも、彼はこの境地を体験する。

I was suddenly sensible of such sweet and beneficent society in Nature, in the very pattering of the drops, and in every sound and sight around my house, an infinite and unaccountable friendliness all at once like an atmosphere sustaining me, as made the fancied advantages of human neighborhood insignificant, and I have never thought of them since. Every little pine needle expanded and swelled with sympathy and befriended me. I was so distinctly made aware of the presence of something kindred to me, even in scenes which we are accustomed to call wild and dreary, and also that the nearest of blood to me and humanest was not a

person nor a villager, that I thought no place could ever be strange to me again. (Walden, 132)

“The groves were God’s first temples.” は William Cullen Bryant の詩 “A Forest Hymn” 中の有名なことばだ。ロマンチズムの詩人, Wordsworth, Emerson, Whitman 等にとって神は自然と同一であり自然は神の一部であった。Thoreau はその意味をこめて Nature を大文字で書く。Edwin Fussell も言うように, “an infinite and unaccountable friendliness” は明らかに神を指す⁹⁴。Thoreau が一番近く住みたいのは, “the perennial source of our life” であると彼自身が語っている (Walden, 133)。彼は、雨音、松の葉、彼を囲繞するあらゆる情景に共感し、最深において彼と自然界は同じ一つの源泉につらなるという一体感を意識している。この主客の一体感が最高の高まりを見せているのは, “I was so distinctly……” 以下の文である。彼の心はまわりの自然と同化してしまっている。生命のある植物のみでなく、水、音、風景などとの共感融合の深さを物語る。自然に融合しようとする静的な受動的態度によって人間に本性的に存在する未来へ前進しようとする能動性が消え完結した存在感に満ち、彼は「永遠の今」に停止しているのだ。 “In eternity there is indeed something sublime. But all these times and places and occasions are now and here. God himself culminates in the present moment, and will never be more divine in the lapse of all ages.” (Walden, 97)

この神秘体験は若き日に限られてはいない。彼の晩年にも見られる。拘置所の入口に沿い執着心を捨て去りゆっくり歩いている時にも体験する。 “Suddenly, in some fortunate moment, the voice of eternal wisdom reaches me even in the strain of the sparrow, and liberates me, whets and clarifies my senses, makes me a competent witness.” (Journal, May 12, 1857.) Thoreau は真に物が見える境地にある。Kopp は、生存の無限の膨張感によって永遠の英知を直観したのだ、と説明している⁹⁵。

こう見てくると、Thoreau は生涯にわたり真の神秘家に至るための修業の実践家であり、その道程において神秘体験をしたといえる。この体験により彼は自然と人間は一つであることを知ったはずである。これはきわめて東洋的な体験であった。Hawthorne の短篇 “Young Godman Brown” では森林は悪の象徴として描写されているが、これは初期ピューリタンの自然観でもある。自然を人間の征服の対象と考えたのは西欧の古来の考えであった。Thoreau にとって、自然は恵み深く自己と一体のものであった。彼は荒々しい自然も描いたが、その中に神々しい畏怖の念を感じとっていたことは注目されなければならない。

以上述べて来たように、神秘家 Thoreau の第一義は自己の新生のための行の実践であった。従って、彼が政治社会に目を向けるときも、変革さるべきは社会ではなく個人の側に求めたのは当然であった。 “A Captain John Brown” に例をとろう。Thoreau はこの評論で Brown 大尉の革命的態度を高い調子で称讃している。大尉は妥協を排し良心に従って生き、自己の奴隷解放の主張をハーバース・フェリー占拠によって示した。大尉の良心と実践の一致こそ Thoreau が高く評価した点であったと言える。

5

人間の精神は他者が入り込めぬ部分が多いが、Thoreau の神秘体験の深さについて考察を試みる。神秘家の彼が自然と深く融合するという神秘体験をしたことは前に述べた。Kopp は Thoreau が自然との完全な一体感の中で自然の中に神の啓示を発見し、永遠の生命の本源と共にあり、観喜と高揚と恍惚の神秘体験をした世界の神秘家の一人だ、と論じている。彼は、*“Like all mystics, Thoreau was a man of one idea, and that idea was the attainment of mystical union with God. ...his individual soul became united with the Supreme Soul. ...”*⁷³ と述べる。Walter Harding も *“Basically Thoreau's life was a happy one.”*⁷⁴ と結論する。Reginald L. Cook も天の啓示に焦点をさぼるピューリタンの神秘家と自然との調和に生きる自然神秘家 Thoreau を明確に区別した上で、*“Thoreau's mysticism consisted rather in opening than closing the eyes, and in feeling inwardly en rapport with the outward.”*⁷⁵ と述べる。*“union with God”* や *“rapport with the outward”* の言葉が示すように、これらの批評家はユダヤ＝キリスト教の伝統の神秘主義の視点から論じている。前述したように、Thoreau は印度聖典から神秘主義の実践方法を借用したのではなかったか。

ウパニシャッドでは、ヨーガの修業者は現象的世界から離脱し顕在意識の働きの消滅後、神秘的直観をえて Ātman (個人我) と Brahman (最高我) とが合一するアートマン観見の境地、即ち「梵我一如」の状態に入るといふ⁷⁶。ヨーガ行者の中で Samādhi (三昧) の境地に達する者、あるいは禅の不立文字の段階に到達する者は、修業者の中の少数であると言われている。Thoreau は、自己の呼吸と宇宙の呼吸とが合体し不則不離になり、宇宙に深く融合し、甘美感が偏満し、静かで豊かでバランスのとれた無理のない心の状態に到達しえたのだろうか。

最近の脳解剖学によれば、神経以外に大脳皮質に直接の伝達路があることが解明されており、この伝達路が霊的能力に関係しているらしい。だから、人間には誰にも、自己自身の精神を徹底してきわめていくとき、自然と同化したり神の顕現の感じをもつという神秘感、つまり見えない糸を見抜く魂の目が、ある程度までだれにも備わっていると言える⁷⁷。それ故、例えば William James が列挙しているように、この体験の記録は多い。Thoreau の神秘体験をこの範疇に入れている心理学者もいる⁷⁸。Thoreau 自身、自然との共感の神秘体験を絶対無の深さまで押しやりそれが破れて観喜と至福の喜びにしたという身心一如の境地に到達しえなかった、というよりその前でとどまっていたように思われる。彼は *Journal* で、*“It is the marriage of the soul with Nature that makes the intellect fruitful, that give birth to imagination”* (Aug. 21, 1851) と語っており、*“the marriage of the soul with Nature”* の言葉は東洋の神秘家の言葉ではない。Thoreau の禅味を深く研究した R. H. Blyth も Thoreau の浅さと禅の深さには十分な配慮を欠いていると思われる⁷⁹。誰でも春の花咲く高原に出たり、原生林の中に独り入ったりすれば、自然と自己の一体感或は自己が自然に溶け込んでいると感じるものである。早朝は Thoreau の生命の再生の時であったが、日没時は前述したように、自然との合一にふさわしい時だった。*“I have come to this hill to see the sun go down, to recover sanity and put myself again in relation*

with Nature.” (*Journal*, June 5, 1854).

Thoreau は自己と自然の融合の神秘体験は語るのだが、その時の心の歓喜と高揚感はさして述べていないことに我々は気付く。真の神秘体験の頂点は、融合の瞬時における絶妙の歓喜が、退転することなく、そのまま、自己の平生の境地となるに至った状態である、と言われている³⁹。この観点から Thoreau を見るとどうだろうか。Walden 湖畔での神秘体験の六年後の日誌に “Here I am thirty-four years old, and yet my life is almost wholly unexpanded. How much is in the germ! There is such an interval between my ideal and the actual in many instances that I may say I am unborn.” (July 19, 1851) とある。これを彼の真実の告白と受けとめるべきだろう⁴⁰。ここには、満足しきれない彼の心情が切切と吐露されている。絶対者との合一の境地を仰望し、神秘体験をもちつつなお、一つ満たされぬうずきのあったのは何故であろうか。

Thoreau は *A Week* で “We need pray for no higher heaven than the pure senses can furnish, a purely sensuous life. …The ears were made, not for such trivial uses as men are wont to suppose, but to hear celestial sounds. …The eyes were made. …to behold beauty now invisible. May we not see God?” (W. I. 408) と述べる。この言葉から、意識的自己の根底にある「みるもの」によって神を見る彼の態度が明白である。また、浄化された純粋な感覚的生活によって「みるもの」を鋭敏に保とうとした態度もうかがえる。音域をこえて聞き、視界のかなたを見る彼は、「みるもの」によって永遠なる一者に触れたのである。 “I see, smell, taste, hear, feel, that everlasting Something to which we are allied, …” (W. I. 182) しかし、肉体的感覚は神秘的洞察の真の手段となりえず、「みるもの」に止まっている限り、理性を超越した「絶対的自由」の境地には到達しえない。神秘の世界で絶対的自由を享受するためには、徹底した無執と自我の滅却が不可決であり、「見」の域を脱した二の一ではない「無私」の境地が要求される⁴¹。

Thoreau は自己主張と反抗の精神をもち動的個人主義の本性をもっていた。水の如く器に従って生きる静的な受動性に徹する性向は薄かった。これは「無我」の境地に至る障害となった。従って、印度聖典の中に静的な瞑想を学んだがそれに徹しきれなかったのだ。

Thoreau は、神秘家に至る常套的手段をとった。しかし、その方法において間違っていた。孤独を愛し瞑想にふけたが社会から隔離し静寂と瞑想に沈潜したのではない。禁欲と清貧に生きたが物質と肉体からのそれであり、自己を追いつめ心の貧しさをもって豊かさへ転ずるまで自己滅却を実践したのではない。神秘家を志向し自然に没入したが長年に亘って俗界から離脱することはなかった。彼はヨーガ行者のような自虐的禁欲や苦行は行わなかった。我執の修羅を乗りこえ、無心になり、没自我の境地にまで到達できなかったのは、Thoreau には絶対的なものを激しく追求する態度がないからである⁴²。身心両面で歩むと述べても身心一如の世界まで歩みを徹したのではない。

神秘家を自称し *Gita* の説く神秘主義の極点を憧憬しつつ生きた Thoreau は、証悟の体験をもった智顗や山崎弁栄や大森曹玄、更に Meister Eckhart や十字架のヨハネのように無神秘のまま一大神秘に到達しえた一群の大神秘家たちに比肩しえなかったのである。前述したように、要するに、彼の方法がヨーガ行者や禅の修業僧の方法と類似していても、その実践の根本において間違っていたからだ、というべきである⁴³。

『マスの法典』や *Gita* の Thoreau への影響は絶大ではあったが、彼の骨髓にまでは達しなかったと結論できる。彼の神秘主義は東洋の神秘主義の影響はうけたが、本質的にはロマンチックな nature mystic であり西洋的な神秘主義であるといえる。さりとて、Plotinus や Meister Eckhart 等のように魂の根源的存在である絶対的一者との深い神秘的合一を達成したわけでもない⁴⁴。

神秘家 Thoreau のこの挫折感が益々彼を自然へ没入せしめていったのではなかろうか。生来の自然愛好心に加え、この挫折感が原動力となって、歴大な日誌を残さしめたと考えることもできよう。この点の病蹟学的検討は今後の課題としたい。

註

- (1) Ralph Waldo Emerson, "Thoreau," *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson* (New York: AMS Press, 1968), Vol. X, p.456., p.480.
- (2) Joel Porte, *Emerson and Thoreau: Transcendentalists in Conflict* (Middletown, Conn.: Wesleyan University Press, 1967), p.10.
- (3) Everett Carter, *The American Idea: The Literary Response to American Optimism* (Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1977), p.94.
- (4) Henry Seidel Canby, *Thoreau* (Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1965), p.xii.
- (5) William Ellery Channing, *Thoreau: The Poet-Naturalist* (New York: Biblo and Tannen, 1966), p.50.
- (6) *The Journal of Bronson Alcott*, ed. Odell Shepard (Boston, 1939), p.318., p.350.
- (7) Henry D. Thoreau, *Walden*, ed. J. Lyndon Shanley (Princeton: Princeton University Press, 1971), p.268. 以下同書からの引用は()中に Walden とページ数で示す。
- (8) Mark Van Doren, *Henry David Thoreau: A Critical Study* (New York: Russell & Russell, 1961), p.109.
- (9) Sherman Paul, *The Shores of America: Thoreau's Inward Exploration* (New York: Russell & Russell, 1971), p.256.
- (10) Helen A. Snyder, *A Study of Henry D. Thoreau's Philosophy of Life with Special Reference to the Influence of Hindoo Philosophy* (Heidelberg University, 1900).
- (11) Arthur Christy, *The Orient in American Transcendentalism: A Study of Emerson, Thoreau, and Alcott* (New York: Octagon Books, 1972), pp.187-233.
- (12) Joseph Wood Krutch, *Henry David Thoreau* (New York: William Morrow & Company, Inc., 1974).
- (13) Charles Calvin Kopp, "The Mysticism of Henry David Thoreau," unpubl. diss. (Ann Arbor, 1963).
- (14) Francis Grierson, *Modern Mysticism and Other Essays*. 日夏耿之助訳『近代神秘説』(牧神社, 1976), pp.37-38.
- (15) 神秘主義の本質と諸形態については、鈴木大拙『禅の立場から』(大正5年)に150頁にわたる詳述がある。
- (16) 瓜生津隆真「ナーガールジュナと神秘思想」日本仏教学会編『仏教における神秘思想』(平楽寺書店, 1977), p.41.
- (17) Willam R. Inge, *Christian Mysticism* (New York, 1956), pp.4-5.

- (18) Evelyn Underhill, *Mysticism: A Study in the Nature and Development of Man's Spiritual Consciousness* (London: Methuen & Co LTD, 1977), p.97.
- (19) Henri Serouya, *Le Mysticisme*. 深谷哲訳『神秘主義』(白水社, 1977), p.11.
- (20) William Jones, *The Varieties of Religious Experience: A Study in Human Nature* (New York: Collier Books, 1977), pp.299-336. Evelyn Underhill, *Mysticism*, pp.83-113. 岸本英夫『宗教神秘主義—ヨーガの思想と心理』(大明堂, 1975), pp.41-51. 藤田富雄『宗教哲学』(大明堂, 1976), pp.115-149.
- (21) Makoto Rokugawa, "Romanticism and the Transcendentalist Thoreau in *Walden*," 『長野工業高等専門学校紀要』第5号, 1973. pp.213-217.
- (22) Miriam Alice Jeswine, "Henry David Thoreau: Apprentice to the Hindu Sages," unpubl. diss. (Ann Arbor, 1971). はこの考えにたっている。
- (23) *The Writings of Henry David Thoreau*, 20 vols., Manuscript Edition (New York: AMS Press, 1968), Vol. VII, pp.229-230. 以下同全集からの引用は()中にWと巻数と頁数で示す。
- (24) Koh Kasegawa, "Thoreau and the *Bhagavad-Gita*" (『英文学思潮』青山学院大学英文学会, 昭和38年12月), pp.43-61.
- (25) *The Correspondence of Henry David Thoreau*, ed. Walter Harding and Carl Bode (Westport, Conn.: Greenwood Press, 1974), p.251.
- (26) 拙稿「H. D. Thoreau の自然観—その二重性について」『長野工業高等専門学校紀要』第6号, 1976. pp.111-126.
- (27) 拙稿「Thoreau の荒野と野生—西方志向の特質—」『長野工業高等専門学校紀要』第9号, 1978. pp.81-95.
- (28) Norman Foester, *Nature in American Literature: Studies in the Modern View of Nature* (New York: Russell & Russell, 1958), p.101.
- (29) *The Annotated Walden*, ed. Philip Van Doren Stern (New York: Clarkson, N. Potter, Inc., 1970), p.261.
- (30) Edwin Fussell, *Frontier: American Literature and the American West* (Princeton: Princeton University Press, 1965), p.206.
- (31) Charles Calvin Kopp, "The Mysticism of Henry David Thoreau," p.105.
- (32) *Ibid.*, p.406.
- (33) Walter Harding, *A Thoreau Handbook* (New York: New York University Press, 1970), p.167.
- (34) Reginald L. Cook, *Passage to Walden* (New York: Russell & Russell, 1966), pp.134-135.
- (35) ヨーガ・スートラではこの融合の思想を排斥する。この立場からは、自己と絶対者との合一の実体感とは然として心理作用の領域に属するもので誤れる自我意識であり、ヨーガ行者は、この境地に留ることなく一層深遠な境地へ没入しなければならないとする。
- (36) 安藤正英『アメリカ文学と禅—サリンジャーの世界—』(英宝社, 1970), p.17. 岸本英夫『宗教神秘主義』, p.51.
- (37) 島崎敏樹『心で見る世界』(岩波新書, 1977), pp.43-46.
- (38) R. H. Blyth, *Zen in English Literature and Oriental Classics* (Tokyo: The Hokuseido Press, 1942), p.104.
- (39) 岸本英夫『宗教神秘主義』, pp.49-50.
- (40) 安藤正英『ニュー・イングランド文学精神の諸相』(朝日出版社, 1977), p.49.

- (41) 『仏教における神秘思想』 p.46.
- (42) 尾形敏彦『エマソンとソーロウの研究』(風間書房, 1972), pp.243-294.
- (43) 前掲書, p.268.
- (44) 高橋亘『西洋神秘主義思想の源流』(創文社, 1976). 植田重雄『神秘の芸術—リーメンシュナイダーの世界—』(新潮選書, 1976).

(本論は、昭和53年10月14日、奈良女子大学において開かれた日本アメリカ文学会 (American Literature Society of Japan) 第17回全国大会で発表した拙稿「神秘主義者ソーロウの挫折」を短縮し改稿したものである)。